水郷柳川の匠

市では、長年、同一職業に従事して、技能や技術を磨き、後進の指導育成にあたるなど市の産業振興に功績があった技能功労者を昨年度から表彰しています。今号では、今年度、技能功労章を受賞した２人の「水郷柳川の匠」を紹介します。

独自の造船法を開発

FRP漁船等製造
芳司（ほうし） 勝（まさる）さん（佃町・84歳）

ノリの養殖などに使う漁船や掘割のドンコ舟。今ではプラスチック製がほとんどですが、九州でいち早くガラス繊維で強化したプラスチック（FRP）製の船を造った芳司さんは、江戸時代から続く船大工の18代目。「先祖は大阪で船大工をしていたようですが、柳川藩の船を造ったことから、こちらへ招かれたそうです」と芳司家の歴史を語ります。

16歳から父の元で修業した芳司さんが、FRP製の船を造るようになったのは昭和35年ごろ。木造船に使う樹齢100年くらいの大木の数も減り、木を切ってきても中が腐っていて使い物にならないこともあったとか。そのため「プラスチック製の時代が来る」という「読み」から、普及したばかりのFRP造船技術を習得。FRP製は「型」で製造するのが一般的なため、「うちのように小さい造船所は、大きな船の『型』をたくさん置いておく場所がないんです」と芳司さん。そこで木造船を造る技術を生かし、水に浮く軽くて丈夫な塩化ビニール製の素材で船の原型を造り、その上にガラス繊維を何層も重ねて強度を出し、最後にプラスチックの樹脂で固めていくという型がいらない独自の方法を開発しました。西日本各地に出かけ、同業者に技術指導を行うなど業界に大きく貢献。その技術で、FRP製の水槽や貝などを獲るときに使う大きな桶なども一から作ります。

また昭和30年代、水郷柳川の川下りの始まりとなる5隻の木造のドンコ舟を造ったのも芳司さん。現在、市内でドンコ舟を造っているのは、芳司さんだけとなっています。

「趣味は仕事。それが健康の秘けつです」と芳司さんは今も現役。19代目として家業を継いでいる息子の圭史郎さんと共に、船大工の伝統をこれからも守り続けます。

ドンコ舟が木製からFRP製へ変わり始めた昭和30年代後半の写真。これも芳司さんが製造したもの

細部に光る職人の技

畳工
小畠公晴（おばたけきみはる）さん（高畑・73歳）

古くからイ草が広く栽培され、畳やゴザの生産も多い柳川。畳は、イ草などで作った畳表を、芯にあたる板状の畳床（とこ）に張り、畳の縁（へり）に帯状の畳縁を付けます。小畠畳店は創業明治10年の老舗で、５代目の小畠さんは18歳から畳を作り続けて54年。店にいた２人の職人から技術を叩き込まれました。市内で唯一弟子を取り、現在５人目を育成している小畠さん。「畳にはいろんな形があるから」と、機械化が進む畳製造で、弟子には機械作業だけではなく、手作業による畳作りを指導し、畳職人としての技を伝えています。

畳の出来に差が出るところは、「寸法どおり仕上げることができるかどうか」と小畠さん。部屋の形は微妙にゆがんでいたりするので、部屋の広さや形を正確に計らないと、畳が入らなかったり、逆にすき間が空く原因に。「寸法に合わせて畳床を裁断する。これができるまで２～３年はかかりますね」。また、厚さが普通の２倍あったり、インテリアとして使うような特殊な畳では、畳縁の出来にも気を配ります。四隅の模様をうまく合わせなければならないので、畳縁の縫い合わせは手作業。小畠さんはこの模様合わせの技術が優れていて、丁寧できれいな仕上がりだと発注者や建設業界でも高く評価されています。

近年は畳の需要が減り、「手掛けるのは、ピークだったバブル時代に比べ半分の年３０００枚程度」と落ち込みを心配しています。床にフローリングが多く使われていることもありますが、「畳は固いフローリングよりも柔らかく、足腰に負担がかかりません。二酸化窒素や湿気も取り込んでくれる健康に良い床材。今は畳縁が無いモダンな畳もあり、もっと関心をもってもらえれば」と畳の良さを伝えていきたいと語ります。

畳縁の模様合わせ。１枚の畳縁で四隅の模様をきれいに合わせるため熟練した技術が必要